B. 対象および方法

東京都内で外国人登録者数が第2位であるA区で、公立保育所60ヶ所に在籍中の外国籍児童数を照会し、該当すると回答された児童244人の保護者を対象とした。該当児童のうち中国および韓国籍の児童の年齢分布はそれぞれ、0才児9名(5,4)、1才児34名(21,13)、2才児38名(21,17)、3才児34名(22,12)、4才児38名(21,17)、5才児38名(24,14)で、0歳児を除くとほぼ同数の分布であった。

調査は自記式調査票を用いて、区役所から各保育所経由で対象者に配布し、記入後は保育所経由で区役所へ返送という形をとった。調査票は対象者の国籍に合わせて、中国語、ハングル、日本語の3種類を作成し、平成15年8月から9月にかけて調査を実施した。

調査票の構成は、①対象者の基本的特性：年齢、国籍、性別、滞在年数、宗教、日本語能力、②家庭状況、③予防接種に関する項目：予防接種の接種状況、情報の入手方法、必要性に関する認識、④子育ての負担と楽しさ、医療への信頼、日本の暮らしやすさ、保育園への信頼の5領域から成る子育て及び日本での生活に対する認識45項目、⑤子どもの状況：子どもの性別、出生順位、人数、出生地などから構成した。

C. 結果

1）回収率と分析対象者の基本的特性（表1）

調査票の配布数244（中国語117、韓国語97、日本語30）通のうち、146（中国語98、ハングル21、日本語27）通が回収され回収率は59.7%だった。

回答者の内訳は、母親が82.2%、父親15.8%、無回答2.1%で、ほとんどが母親からの回答であった。平均年齢は、母親32.8（±5.0）歳、父親34.0（±4.4）歳、国籍は中国・台湾90人（61.6%）、韓国・朝鮮33人（22.6%）、日本23人（15.8%）だったが、日本国籍の者は1人を除き出生地は中国であった。なお、同国人同士の結婚は97人で、国際結婚は37人だった。宗教はほとんどが無宗教との回答だった。

日本での滞在年数は、最短1年から最長40年と幅があったが、平均では9.9(±7.3)年で5年から14年滞在している者が最も多かった。日本に永住予定の者は66(45.2%)人と半数近かったが、「未定」も47(32.2%)人と少なくなかった。日本語の理解力については、「大変よくわかる」48（32.9%）人、「大体わかる」68（46.6%）人で、日常生活のうえではほぼ問題ない状況であることがうかがわれた。

2）日本の医療に関する印象(表2)

大多数の者が日本で受診しており、受診時および日本の医療についていずれも多くの者が「とてもよい」または「まあまあよい」との印象を持っていたが、少数ながらも「時と場合による」や「よくない」、「あまりよくない」と感じている者もいた。

3）家族や住宅および就労の状況(表3・4・5)

家族構成は142（97.3%）人が子どもと父母の核家族で、公営住宅に住んでいる者が64(43.8%)人で最も多かった。仕事については常勤または自営業が、母親69人、父親119人だったが、母親ではパート勤務が多く55人であった。勤務時間の平均は、母親7.7時間、父親8.9時間で父親の就労時間がやや長い傾向がみられた。

4）子どもの状況と予防接種への助言(表6)

子どもの人数は 2 人が最も多く 77（52.7%）人、1 人が 54（37.0%）人で、ほとんどが日本で生まれた子どもだった。

また、大多数が日本の母子健康手帳を持っており、予防接種についての助言も多くの者が受けていた。助言を受けた場所は保健所 31 人、保健センター30 人、病・医院と保育所各 4 人だった。母国で予防接種についての指導が「ある」と87(59.6%)人が回答していた。

5）予防接種の接種率と予防接種に関する質問の回答(表 7・8)

接種率が高かったのは、定期接種のBCG や百日咳・ジフテリア・破傷風、風疹、麻疹などで、接種率が低かったのはムンプスやインフルエンザなどの任意接種のものであった。予防接種を受けさせるには、「保育園を休ませて連れて行く」が70(47.9%)人「保育園の帰りに自分が連れて行く」55(37.7%)人で、「その他」13(12.3%)人では、「休暇を取ったり休日を利用して連れて行く」と答えたものが多く、他人に頼らずに保護者自身で連れていっている者がほとんどであった。また、予防接種に関する情報の入手先としては「保健所からの葉書」が 89(61.0%)人で最も多く、次いで「区からのお知らせ」55（37.7%）人であった。予防接種をうけさせることについての説明は99(67.8%)人が「受けていた。」説明の内容については「副反応について」を希望する者が多く、65(44.5%)人、次いで「接種後の生活について」52（35.6%）人、「母国語で」の説明の希望する者も44(30.1%)人と少なくなかった。予防接種の価格については、「高い」の回答が56（38.4%）人で最も多かった。予防接種を受けさせる理由は、「子どもの健康に必要」と答えたものが大多数(90.4%)で、子どもの健康を守る上で予防接種が重要であるとの保護者の認識がうかがわれた。

6）子育て及び日本での生活に関する認識の回答(表 9)

子育て及び日本での生活に関する認識45 項目に対する回答に「思わない」0 点から、「そう思う」3 点までの得点を与え5 領域別に、(平均値 2.0 以上は太字）降順で表 9 に示した。回答からは多くの者が子どもを大切に思って子育てしていることや、保育所に対して信頼を寄せていることがうかがわれた。また、子どもの病気や子育ての相談窓口や子育ての情報等に関するサービスを希望している者も多かった。回答者は日常の日本語のコミュニケーンには不自由ないと思われたが、やはり母語でのサービスを希望している者が多かった。日本語ができないと差別されると感じている者も半数を超えていた。

また、5 領域別に合計得点を算出し滞在年数、国籍、永住志向による違いについて検討を加えた(表 10-1～3)。滞在年数は 5 区分、国籍については中国・韓国・日本の 3 種類、永住志向は「帰国予定がある」、「定住を希望」、「未定」に分けた。滞在年数では、年数の長い者が子育ての楽しさを感じていた。国籍別では、韓国籍の者が子育てを楽しく感じ子育ての負担が低かった。永住志向による違いはみられなかった。

7）自由回答のまとめ(表 11)

自由回答には 38 名の記入があった。記入内容は 1.予防接種に関して、2.医療機関や制度等に対する希望、3.日本の医療や制度について、4.医師の対応(治療な

ど)、5.その他、の5種類に分類できた。

1．予防接種に関しては、中国との時期の違いや医療機関による回数の違い、任意の接種を受けなかった場合の危険性の情報を希望する意見などが記入されていた。また、日本人の予防接種に対する意識の低さを指摘する意見もあった。

2.医療機関や制度等に対する希望と 3.日本の医療や制度についておよび4.医師の対応(治療など)の記載からは、休日や夜間、24 時間体制など小児医療の充実への希望や医師の対応へ疑問などがあげられていた。回答者の記載には以前から指摘されていた事項も含まれており、在日外国人に特有とは言えないものも多いが、5.その他からは、言葉の壁の存在も推測された。

D. 考察

1) 回答者について

回答者には、日本国籍の者が 23 名含まれていたが、出生地からみて1名を除き中国残留日本人孤児の家族と考えられた。また、韓国籍には永住外国人2名が含まれていた。将来的に日本社会は、外国籍の人々の流入や日本人の海外進出、国際結婚などが増加し、日本で生まれ育った外国籍の人や海外生活の長い日本人など、さまざまの生育環境や多様な文化背景を持つ人々が混在する社会へ移行していくと考えられる。そのような考えから、先述した回答者も分析の対象に含めた。回答者には対象者数の多かった中国・韓国籍の者が大多数を占めたが、事前照会で把握したブラジル、フィリピンのような対象者数の少ない国籍の者からの回答がほとんど得られなかった。調査票の言語を3種類にしたため、回答が困難であったのではないかと考えられる。今後、同様の調査を実施する際には対象者の国籍(母語)に合わせて調査票を準備することが必要と考えられた。

2)予防接種に関して

接種率で定期接種と任意接種による違いが認められた。さいたま市の入学予定者の接種率[6]と比較すると、定期接種 6 種の接種率は風疹を除くと全体的にしたまわっており、特にポリオの接種率が低かった。任意接種では、ムンプスではやや接種率が低かったが、水痘の接種率はさいたまの接種率[6]より高かった。

回答者の予防接種に関する情報源は、保健所や区からのお知らせに偏っていた。日本人の保護者のような病院への問い合わせや新聞の活用[4]、知人からの口コミの情報はほとんど得られていなかった。また、母子保健手帳の保有率は高かったが、日本人の保護者[3]のようには活用されていないのではないかと考えられた。

定期接種と任意接種にみられる接種率の違いは、情報源が偏っていることが最大の原因と考えられる。定期接種については比較的情報が得られているが、任意接種に関しては情報が得られにくいのではないかと考えられた。しかし、定期接種のなかでもポリオや日本脳炎の接種率は他の6種に比べると低く、保護者の危険性に対する認識の低さがうかがわれた。また、定期接種は接種時期が固定されているため、接種を希望していたにもかかわらず何らかの原因[4][5]で接種時期を逃した可能性も考えられる。

また、予防接種の値段は高いと感じている者が多かったが、子どもの健康に必要だとの認識を持っている者が大多数で、保護者が予防接種の重要性を十分に認識していることがうかがわれた。

外国籍の児童の予防接種率を向上させ

るには、日本語以外の言語による情報の充実や情報源の拡大、および接種スケジュールの弾力化を検討する必要性が示唆された。

2) 子育ておよび日本での生活に関する認識

子育ての楽しさや負担に関する項目で国籍や滞在年数による違いがみられた。滞在年数の長い者が子育てを楽しく感じ負担が少なかった。日本語の理解力も深まり日本での生活にも適応していることが原因ではないかと考えられた。国籍による違いは、回答者数の差が大きいことの影響ではないかと考えられた。全体的に、日本の医療や保育園への信頼が大きく、子どもを「生きがい」として大切に育てようとしている保護者の意識がうかがわれた。一方で、日本での生活は経済的な負担が大きく、言葉の壁を感じていることも明らかになった。また、母語で相談できる窓口や情報源への希望も多く、在日外国人にとって言葉の問題は重要であることが示唆された。

最後に調査に多大のご協力をいただきましたA区役所保育課の皆様、各園の園長先生ならびに職員の皆様、そしてご回答くださった保護者の皆様に心よりお礼申し上げます。

E. 文献

1) 加藤充子、高橋弘明：予防接種率に影響する因子の検討　三歳児健康審査問診票より.小児保健研究 1999;58(3):373-378.

2) 多賀俊明、田中洋子、藤田由貴子、坂井敦子、内田靖：予防接種を受けていなかった理由のアンケート調査 市立長浜病院小児科を受診した麻疹、水痘、流行性耳下腺炎に罹患した患児に対して.チャイルドヘルス 2000;3:729-732.

3) 山本靖子、中野智津子、菅弘子.：予防接種に対する保護者の意識調査 予防接種法改正後の現状と保護者支援についての検討.神戸市看護大学短期大学部紀要　1998;17:61-66.

4) 長谷川ひとみ、山田江美子：予防接種に対する両親の意識調査.高松市民病院雑誌　2000;16:103-106.

5) 明石洋子、堀内真理、溝下好子.：予防接種に対する母親の認識と接種状況.小児看護　1999;22:494-500.

6) 太田耕造、阿部理一郎、手嶋力男ほか：入学児童予防接種状況調査報告(第7報)－さいたま市平成14年度入学予定者－.厚生科学研究医薬安全総合研究　安全なワクチン確保とその接種方法に関する総合的研究　平成13年度研究報告書　60-61.

表１ 回答者の基本的属性･特性

項目		人数	%
回答者			
	母親	120	82.2
	父親	23	15.8
	無回答	3	2.1
国籍			
	中国･台湾	90	61.6
	韓国･朝鮮	33	22.6
	日本	23	15.8
回答者の出生地			
	中国	102	69.9
	韓国	11	7.5
	台湾	2	11.0
	朝鮮	5	1.0
	日本	17	8.0
	ミャンマー	1	0.7
	無回答	10	9.7
宗教			
	無宗教	106	72.6
	キリスト教	13	8.9
	仏教	12	8.2
	イスラム教	1	0.7
	その他	2	1.4
	無回答	12	8.2
滞在年数			
	5 年未満	26	17.8
	5～9 年	55	37.7
	10～14 年	42	28.8
	15～19 年	8	5.5
	20 年以上	10	6.8
	無回答	5	3.4
今後の予定			
	1 年以内に帰国また移住予定	5	3.4
	1 から3年以内に帰国または移住予定	6	4.1
	将来的には帰国または移住予定	14	9.6
	日本に永住予定	66	45.2
	未定	47	32.2
	無回答	8	5.5
日本語の理解力			
	大変よくわかる	48	32.9
	大体わかる	68	46.6
	少しわかる	26	17.8
	ほとんどわからない	2	1.4
	無回答	2	1.4

表2　日本の医療に関する印象

N=146

項目	N	%
受診の有無		
ある	137	93.8
ない	8	5.5
無回答	1	0.7
受診の印象		
とてもよい	62	42.5
まあまあよい	70	47.9
あまりよくない	5	3.4
よくない	2	1.4
時と場合による	3	2.1
無回答	4	2.7
医療の印象		
とてもよい	61	41.8
まあまあよい	67	45.9
あまりよくない	9	6.2
よくない	3	2.1
時と場合による	2	1.4
無回答	4	2.7

表3 家族の状況 N=146

項目	N	%	N	%	N	%
同居家族	いる		いない		無回答	
配偶者	142	97.3	0		4	2.7
子ども	144	98.6	0		2	1.4
回答者の兄弟	5	3.4	140	95.9	1	0.7
回答者の親	4	2.7	141	96.6	1	0.7
配偶者の兄弟	3	2.1	142	97.3	1	0.7
配偶者の親	5	3.4	140	95.9	1	0.7
親戚	2	1.4	143	97.9	1	0.7
その他	2	1.4	144	98.6	0	

表4 住宅の状況 N=146

項目	N	%
公営住宅	64	43.8
賃貸アパートなど	41	28.1
一戸建て	20	13.7
その他	16	11
無回答	3	2.1

表5 就労の状況 N=146

項目	N	%	N	%
	母親		父親	
常勤	52	35.5	104	71.2
自営業	17	11.6	15	10.3
パート	55	37.6	14	9.6
求職中	4	2.7	1	0.7
無職	11	7.5	6	4.1
その他・無回答	7	4.8	6	4.1

表6　子どもの状況と予防接種の接種率　N=146

項目		N	%
子どもの人数			
	1人	54	37.0
	2人	77	52.7
	3人	12	8.2
	4人	1	0.7
	無回答	1	0.7
出生地			
	日本	114	78.1
	母国	32	21.9
母子手帳			
	日本の手帳を持っている	137	93.8
	母国のものを持っている	5	3.4
	持っていない	4	2.7
助言			
	受けたことがない	20	13.7
	受けた	111	76.0
	非該当	1	0.7
	無回答	14	9.6
母国での指導の有無			
	ある	87	59.6
	ない	15	10.3
	わからない	31	21.2
	無回答	13	8.9

表7　予防接種の接種率　N=146

種類	受けた		受けてない		無回答	
	N	%	N	%	N	%
BCG	123	84.2	17	11.6	6	4.1
百日咳・ジフテリア・破傷風	122	83.6	18	12.3	6	4.1
風疹	111	76.0	29	19.9	6	4.1
麻疹	109	74.7	31	21.2	6	4.1
ポリオ	87	59.6	53	36.3	6	4.1
日本脳炎	62	42.5	78	53.4	6	4.1
水痘	60	41.1	80	54.8	6	4.1
ムンプス	35	24.0	105	71.9	6	4.1
インフルエンザ	42	28.8	98	67.1	6	4.1
その他	8	5.5	133	91.1	5	3.4

表8　予防接種に関する質問への回答　N=146

項目	N	%
予防接種の受けさせ方		
保育園を休ませて自分が連れて行く	70	47.9
保育園の帰りに自分が連れて行く	55	37.7
誰かに連れて行ってもらう	3	2.1
その他	13	12.3
予防接種の情報の入手先		
保健所からの葉書	89	61.0
区のお知らせ	55	37.7
知人の情報	6	4.1
その他	5	3.4
希望する説明の内容		
副反応について	65	44.5
予防接種後の生活について	52	35.6
母国語で	44	30.1
日本の予防接種制度について	36	24.7
その他	2	1.4
値段について		
高い	56	38.4
普通	38	26.0
安い	3	2.1
無料	26	17.8
予防接種を受けさせる理由		
子どもの健康に必要だから	132	90.4
子どもが病気になると仕事を休まないといけなくなるから	7	4.8
他の人や家族に行くよう勧められたから	4	2.7
その他	1	0.7

表9 子育てや日本での生活に関する認識45項目の回答

	N	平均値	SD
子育ての楽しさ			
子どもは私の生きがいだ	130	*2.6*	0.7
子育てするのは楽しい	130	*2.4*	0.7
子どもは天からの授かりものだ	123	*2.2*	1.1
配偶者と子育ての意見が一致している	126	*2.2*	0.9
将来、子どもには日本で教育を受けさせてここで仕事をさせたい	123	*2.1*	1.0
子どもが病気で死ぬことはない	116	0.6	1.0
子どもは放っておいても健康に育つ	129	0.5	0.7
子どもの病気は自然治癒が一番である	130	0.5	0.8
保育園への信頼			
子どもは保育園が好きだ	130	*2.7*	0.7
保育園からのお知らせを読んだり、先生の話を聞くのが楽しみだ	130	*2.6*	0.6
保育園の先生に子どもの相談をすることが多い	123	1.9	0.9
保育所の先生方に子どもの相談をすることはない	123	1.0	1.1
医療への信頼			
子どもが病気になったらすぐ医者に行く	129	*2.7*	0.7
子どもが病気になった時に相談する場所が欲しい	125	*2.6*	0.7
地域にかかりつけの医者が居る	130	*2.2*	1.0
日本の医療はレベルが高いと思う	130	*2.1*	0.8
医者に子どもの相談をすることが多い	123	*2.0*	0.9
何か病気になっても、日本の医療なら安心だ	126	1.7	1.0
日本の医療は外国人に不親切だ	124	1.4	0.9
日本の医者は信じられない	128	0.8	0.9
子育ての負担			
母国語で子育てを相談できる機関が欲しい	123	*2.2*	1.0
もっと子育ての情報や健康に関するサービスが母国語で欲しい	126	*2.1*	1.1
子どもにかかる費用が大変だ	129	1.8	1.0
母国の友人に子どものことを相談することが多い	124	1.6	1.0
子どもに縛られず、もっと仕事をバリバリしたい	124	1.4	1.1
子どもは体力がないと育たない	114	1.2	1.0
子どもを育てるのは面倒くさい	127	1.1	1.0
子どもの将来のことで配偶者と意見が合わない	123	0.9	1.0
子どもは母国で育てたかった	115	0.9	1.2
母国の人に子どものことで相談することはない	121	0.8	1.0

続く

日本での暮らしやすさ			
日々の暮らしに費用がかかる	127	*2.4*	0.8
日本で信頼できる友人ができた	125	*2.0*	1.1
外国人は日本語ができないと差別される	129	*2.0*	0.9
母国に居るより住居が狭く暮らしにくい	124	1.9	1.4
日本での仕事や職場に満足している	123	1.8	1.0
家族ぐるみで付き合う日本人がいる	121	1.7	1.2
母国に居るより平均年収が上なのでいい生活ができる	122	1.5	1.3
近所にいろいろなことで相談できる人がいる	124	1.5	1.2
地域や職場に友人ができずホームシックになる	123	1.2	1.2
子どもの病気で仕事を休むと解雇されるかもしれないと思う	122	1.3	1.1
職場の人間関係が悪く、居心地が悪い	122	1.2	1.0
隣近所の人間関係がわずらわしい	127	1.0	1.0
物価が高く生活が大変なので早く母国に帰りたい	122	0.8	0.9
区からのお知らせは読まないことが多い	128	0.6	1.0
母国の食材が入手できないでホームシックになる	125	0.6	0.8

*思わない 0、あまり思わない 1、少しそう思う 2、そう思う 3 点を与え平均値を計算した。

表10-1
滞在年数による子育ておよび日本での生活に関する認識の違い

		N	平均値	SD	最小値	最大値	F	p
保育園への信頼	5年未満	24	8.3	1.9	4	12	1.12	0.35
	5～9年	41	8.6	1.4	6	12		
	10～14年	36	8.1	1.6	4	12		
	15年～19年	8	7.8	1.9	4	10		
	20年以上	8	7.5	1.6	6	11		
	合計	117	8.2	1.6	4	12		
日本での暮らしやすさ	5年未満	18	20.7	6.3	12	36	0.55	0.7
	5～9年	27	21.9	3.9	15	32		
	10～14年	31	20.2	4.6	10	29		
	15年～19年	6	20.2	2.1	18	23		
	20年以上	2	21.0	5.7	17	25		
	合計	84	20.9	4.7	10	36		
子育ての楽しさ	5年未満	22	11.4	3.1	7	19	2.68	0.04
	5～9年	35	10.1	2.5	6	15		
	10～14年	31	10.7	2.3	7	15		
	15年～19年	7	11.0	3.5	6	16		
	20年以上	7	13.4	2.6	9	17		
	合計	102	10.9	2.7	6	19		
医療への信頼	5年未満	23	15.8	3.2	8	20	0.33	0.86
	5～9年	35	15.3	2.5	8	19		
	10～14年	37	15.0	3.1	7	19		
	15年～19年	8	15.5	2.0	13	19		
	20年以上	6	15.0	2.1	13	19		
	合計	109	15.3	2.8	7	20		
子育ての負担	5年未満	19	15.3	3.7	9	22	0.33	0.86
	5～9年	31	14.0	4.0	6	20		
	10～14年	28	13.1	5.2	3	24		
	15年～19年	8	15.4	5.9	6	25		
	20年以上	4	10.8	4.3	8	17		
	合計	90	14.0	4.6	3	25		

表10－2 国籍による子育て及び日本での生活に関する認識

		N	平均値	SD	最小値	最大値	F	p
保育園への信頼	中国	70	8.1	1.3	4	11	0.41	0.66
	韓国	27	8.4	2.2	4	12		
	日本	21	8.0	1.9	4	12		
	合計	118	8.2	1.7	4	12		
日本での暮らしやすさ	中国	53	20.9	4.9	10	32	0.13	0.88
	韓国	17	21.2	4.9	14	36		
	日本	15	20.3	3.5	13	26		
	合計	85	20.8	4.6	10	36		
子育ての楽しさ	中国	62	10.5	2.5	6	16	9.89	0.00
	韓国	26	12.7	2.7	7	19		
	日本	15	9.5	2.1	6	13		
	合計	103	10.9	2.7	6	19		
医療への信頼	中国	66	15.6	2.8	7	20	2.27	0.11
	韓国	26	14.3	2.6	8	20		
	日本	18	15.6	2.6	10	19		
	合計	110	15.3	2.8	7	20		
子育ての負担	中国	53	14.1	4.6	5	24	6.70	0.00
	韓国	24	11.9	4.1	3	22		
	日本	14	17.1	3.4	10	25		
	合計	91	14.0	4.6	3	25		

表10-3定住意向による子育ておよび日本での生活に関する認識の違い

		N	平均値	SD	最小値	最大値	F	p
保育園への信頼	帰国予定がある	24	8.5	1.7	5	12	0.59	0.56
	定住を希望	56	8.1	1.7	4	12		
	未定	31	8.2	1.6	6	12		
	合計	111	8.2	1.7	4	12		
日本での暮らしやすさ	帰国予定がある	17	19.8	4.1	13	27	0.79	0.46
	定住を希望	40	21.1	5.3	10	36		
	未定	23	21.7	4.3	13	32		
	合計	80	21.0	4.7	10	36		
子育ての楽しさ	帰国予定がある	22	11.2	3.0	6	18	2.11	0.13
	定住を希望	48	11.3	2.7	7	19		
	未定	30	10.1	2.5	6	15		
	合計	100	10.9	2.7	6	19		
医療への信頼	帰国予定がある	22	14.5	3.0	8	19	2.40	0.10
	定住を希望	53	15.9	2.8	7	20		
	未定	29	15.2	2.3	11	19		
	合計	104	15.4	2.8	7	20		
子育ての負担	帰国予定がある	19	14.4	3.5	8	20	0.56	0.57
	定住を希望	41	13.6	5.0	3	24		
	未定	26	14.7	4.5	8	25		
	合計	86	14.1	4.6	3	25		

表11　自由回答のまとめ

1. 予防接種に関して

任意の予防接種(水痘)を受けなかったところ、罹患し中耳炎なども起こした。受けなかった場合の危険性などの情報がほしい。

病院によって同じ予防接種でも回数が違う。

医療機関で在日外国人向けの予防接種についての相談を実施するよう希望する。

予防接種の時期が中国(北京)より遅い。

予防接種は子どもの成長によいと信じているが、同僚の日本人は全然子どもに予防接種を受けさせていない。

全ての予防接種を無料にしてほしい。
予防接種の通知が来なくて、知人に聞いた。

---

2. 医療機関や制度等に対する希望

小学校卒業までは医療機関を無料で受診できるよう希望する。

医療機関での待ち時間の長さを改善してほしい。(同様2)

医療機関ではもっとわかりやすく詳しい説明をしてほしい。(同様3)

外国人の患者に対して親切でまじめな態度を取る医者が望ましい。

休日診療を充実してほしい。(同様1)

24 時間診療の小児科が欲しい。

小児科の病院や診療施設を増やして欲しい
医療機関で 3 歳以下の子どもの診察を優先するべき

---

3. 日本の医療や制度について

日本の保健所の配置は良いので母国でも同じ機関とサービスが欲しい。

親切で医療技術や薬の使用が適切な医者を見つけたい。

しょっちゅう医者を変えている。

3 歳児健診の通知がなかった。(時々同様のことが起こる)

日本の進んだ医療や保険制度、教育レベルの高い医者などの優れた条件のおかげで安心して育児ができ、心から感謝している。

先天性心疾患の子どもが日本で手術を受け元気に育っており、とても医者に感謝している。日本の医学レベルはとても高いと思う。

在日 3 年だが、日本の医療と保険制度には非常に満足している。

4. 医師の対応(治療など)について

子どもが高熱の時、医者がよく「大丈夫、心配しないで」というが、本当に心配しないでいいのか？
日本は障害児が多くて・・・・・。(意味不明)

子どもが高熱(38-40)の時、点滴をしてほしい。

医者の治療の内容に不満を感じた。

高熱が続いていたのに風邪薬と解熱剤の処方だったため、肺炎になった。

いつも風邪と言われ解熱剤を出される。もっと詳しく調べて診断してほしい。

夜間の急患に薬を1日分しかくれなかったのが理解できない。

日本の医療は進んでいると思っていたが、韓国よりひどい

夜間診療について

夜間の子どもの病気をすぐ見てくれる医者(病院)が欲しい。

夜間の子どもの病気への対応など救急時の場合に相談できる場所がほしい。

夜間に子どもの高熱のため受診した病院の医者はとても態度が悪かった。

夜間の急患を診てくれる小児科が少ない。(同様1)

日本の医者は中国の医者に比べ自信がないように感じる。

医師が精神的に未熟である。

5. その他

外国人のため、医者や看護師の態度が悪いことが常にある。

予約をとるのに時間がかかる(1-2ヶ月もかかった)。

日本語がわからないので、夜間通訳できるところがなく不便。

仕事が忙しいと保健所からの予防接種などの通知を忘れるかもしれないので、督促状をだしてほしい

病院受診時に日本人と違う取り扱いをされ差別されたと感じた。

子どもが病気になった時、相談できる外国人向けの施設がほしい。

子どもが高熱の時解熱剤の座薬を使いよく効いたが、テレビで副作用があるといっていた。大丈夫か？

平成15年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

平成 15 年度厚生労働科学研究費補助金子ども家庭総合研究事業
「多民族文化社会における母子の健康に関する研究」

分担研究報告書

外国人児童生徒に対する教育の現状とニーズ
――群馬県太田市における取り組みから――

根岸親[1]、小島祥美[1]、中村安秀[1]、李節子[2]　重田政信[3]
1　大阪大学大学院人間科学研究科ボランティア人間科学講座
2　東京女子医科大学大学院看護学研究科、3　医療法人小泉重田小児科

＜研究要旨＞
本調査は、外国人の定住化が進む中で、日本社会において外国籍小児が出身国の文化やコミュニティを尊重しつつ健康に育成できる環境づくりをめざし、太田市の教育機関における現状の把握と課題を明らかにすること、また具体的な教育行政施策を提案することを目的にしている。本年度は外国人の子ども、外国人家庭、受け入れ校の教員の 3 点から包括的に実態調査を実施し、外国人児童生徒の教育の現状とニーズの把握を行った。在日期間の長期化や日本で生まれた外国人の子どもの増加により、日本語での日常会話は十分に可能であるが、日本語による学習の習得には課題があること、また母語を喪失しつつある状況の一端が明らかになった。子どもたちの将来の進路進学を見据えながら、ことばの障壁を乗り越え、学力を保障していく具体的な学習方法の提示が切実な課題である。今回の調査結果にもとづき、学習場面での日本語習得および学力定着をめざしたバイリンガル教育の実践に太田市、太田市教育委員会、学校現場と協働しながら取り組み始めたところである。今後は、母語教育を取り入れた学習体制の効果を長期的な視点から検証していくことが求められている。

A. 研究目的：

現在日本には約 180 万人の外国人が暮らしている。年々外国人登録者数は増加し、かつ定住化傾向にある。また総婚姻件数に占める国際結婚の割合は 4.5%に増加し、親が外国人である小児も増加している。すなわち、夫婦が外国人および国際結婚した外国人にとって、出身国の文化やコミュニティを尊重しつつ、日本社会の中でどのように出産し子育てを行うかということが大きな課題となっている。

「平成 14 年度日本語指導が必要な外国人

児童生徒の受け入れ状況等に関する調査」（文部科学省）によると、日本の公立学校に在籍する日本語指導が必要な外国人児童生徒は18,734人となっている。また、在籍期間別にみると、「6ヶ月未満」の児童生徒は減少している一方で、「6ヶ月以上1年未満」、「1年以上2年未満」及び「2年以上」在籍している児童生徒数は増加をしている。日本において外国人の子どもは義務教育への就学は課せられていないにも関わらず、今や日本全域の公立学校に外国人児童生徒は在籍し、在籍期間の長期化、定住化傾向が伺える。

こうした現状の中、筆者らは厚生労働省子ども家庭総合研究事業「多民族文化社会における母子の健康に関する研究」（牛島廣治班）の一環として、外国人住民の割合が高く、行政として積極的に外国人対策に取り組んでいる群馬県太田市の、保健医療・教育分野にまたがる調査研究を進めている。本調査では、太田市における教育機関における外国人児童生徒に対する教育現状を把握と課題しその課題を明らかにすること、学校現場での実践を通して具体的な教育行政施策を提案することを目的としている。本年度は、昨年度の基礎データの分析を基に、外国人児童生徒の教育の当事者である外国人の子ども、外国人家庭、受け入れ校の3つの視点から実態調査を実施し、包括的に現状とニーズの把握を行った。調査後は把握されたニーズを基に、課題解決へ向けた具体的実践の実施・検証を学校現場、教育行政等と共同で実施している。

B. 研究方法：

太田市における外国人児童生徒教育の詳細な現状とニーズを把握するために、外国人児童生徒教育実態調査として、子ども、保護者、教員を対象に次の3つの方法で調査を実施した。本調査では、太田市において最大多数を占め、子どもたちの教育においても問題が顕在化しているブラジル人児童生徒及び保護者を主な対象とした。調査期間は2003年1月から2月である。

①外国人児童生徒への質問紙調査：外国人児童生徒の学習環境、言語環境を明らかにすることを目的として実施した。ルビをふった日本語版及びポルトガル語版の質問票（資料1）による質問紙調査法にて行った。質問内容は回答者の属性（年齢、性別、学年、出生地、来日時の年齢、得意な言語、ブラジルでの通学経験の有無）、学校への満足度、日本語の理解度、各教科の好み、友人関係、家庭での使用言語、ブラジル人学校[1]及びポルトガル語の塾への通学経験有無など17項目である。質問票は太田市教育委員会を通じて教育長からの依頼状とともに太田市内の公立小中学校に送付した。回答した質問紙は各校から教育委員会へ返送し、回収した。回答に際しては、各校の外国人子女教育担当主任の教員や在籍クラスの担任教員、日本語指導助手の方々の協力の下実施された。対象者は太田市内の公立小中学校に在籍する全ブラジル人児童生徒165名で、130名から回答を得た（回収率78.8%）。

②外国人保護者へのフォーカス・グループインタビュー：外国人保護者の教育に対する意識とニーズを明らかにすることを目的として実施した。調査方法はフォーカ

[1] ブラジルのカリキュラムに沿って教育を行っている。太田市内及び隣接する大泉町には児童生徒数が５０人以上の比較的規模の大きいものだけでも５校以上ある。

ス・グループ法により実施した。インタビューガイド（資料 2）は事前に作成した。質問内容は子どもの就学理由、家庭での子どもの様子、公教育に関する意識、子どもの教育に関する今後の希望などであった。ポルトガル語を使用言語として実施した。対象は太田市立Ａ小学校に在籍する子どもを持つブラジル人保護者と太田市立Ｂ，Ｃ中学校に在籍する子どもを持つブラジル人保護者で、２つのセッションに分けて実施した。

③教員への半構造化インタビュー：外国人児童生徒に対する教育に関わる教職員の現状と課題を明らかにすることを目的として実施した。事前に作成したインタビューガイド（資料 3）を使用して、半構造化面接法によるインタビュー調査を行った。質問項目は外国人児童生徒への指導体制と対応状況、指導における課題と改善案、母語がわかる指導助手配置による効果、外国人児童生徒の学校生活、学力、進路進学の状況、外国人保護者の学校への理解と学校行事への参加などである。対象は外国人集住地域にある太田市立Ａ小学校とＢ中学校の管理職者、外国人児童生徒の指導に関わる学級担任、日本語教室担当教員（特配教員）、日本語指導助手[2]、進路担当教員（中学校のみ）各１名ずつとした。

[2]外国人の子どもたちの母語が分かる指導員で外国籍住民を積極的に採用している。勤務時間は平日９時から１２時までの３時間で、勤務内容は日本語教室、普通学級での Team Teaching(T.T)、通訳、連絡文書の翻訳などである。2002,3 年度の対応言語とその派遣人数は、ポルトガル語 10 名、スペイン語２名、中国語１名、ハングル１名の計 14 名を市内の小中学校に派遣していた。雇用形態については、太田市の臨時委託員（非常勤講師）として１年雇用し、現職者からの紹介や一般公募により採用している。

C. 研究結果：

1. 外国人児童生徒への質問紙調査

1) 太田市の公立小中学校に在籍する外国人児童生徒の背景

子どもたちの出生地は「ブラジル」が 66.1%、「日本」が 31.5%だった。日本で生まれた子どもは中学生では一人もいないが、小学生では 40.8%となっており、さらに在籍学年別による出生地を見ると、小学校高学年（4 学年から 6 学年）では全体の 20.0%、低学年（1 学年から 3 学年）では全体の 58.5%が日本生まれだった。小学生の 80.6%、中学生の 48.2%が 6 歳になる前までに来日していた（表 1）。ブラジルでの通学経験がある者は小学生で 17.3%、中学生で 48.3%だった。

2) 子どもたちの言語使用状況

話しやすいことばとしては小学生の 43.9%、中学生の 51.7%が「日本語」と回答した。また、話しやすいことばとして「日本語とポルトガル語」を選んだのは、小学生では 28.6%、中学生では 27.6%の子どもたちが日本語を「話しやすいことば」として捉えていた（図 1-1、図 1-2）。家庭における使用言語については、父親と話すことばについて小学生の 46.7%、中学生の 53.8%が「ほとんどポルトガル語」と答えた。母親と話す言葉では小学生の 49.0%、中学生の 50.0%が「ほとんどポルトガル語」と回答した。兄弟の間では小学生 19.5%、中学生の 21.4%が「ほとんどポルトガル語」と回答した。一方、日本語で話すと回答したのは父親との会話においては小学生で 15.2%、中学生で 19.2%、母親との間では小学生で 17.7%、中学生では

17.9%だった。兄弟姉妹の間では日本語で話すと回答したのは小学生で42.9%、中学生で39.3%だった(図2-1、図2-2)。

3) 各教科学習に対する好み

各教科については、小学生が「好き」と回答したのが多かった教科は、体育(76.5%)、音楽(67.3%)、算数(66.3%)の順だった。中学生では体育(72.4%)、英語(55.2%)、音楽(41.4%)の順で多かった。「嫌い」と答えた人数が多かったのは小学生(16.7%)、中学生(31.0%)とも「社会」だった(図3-1、図3-2)。

2.外国人保護者へのフォーカス・グループインタビュー調査結果

1) 日本の学校への就学理由

保護者の多くは日本の学校への就学理由として日本語を身につけること、そして、日本社会、文化へ適応させたいということを挙げていた。ブラジル人学校に就学させなかった理由については費用の問題についての言及よりも組織的な未熟さについての指摘が多くなされた。一度日本の学校に慣れると、ブラジル人学校に慣れるのはむずかしいという意見も出された。

「私たちはここで苦労しているから、娘達には生活していくために言葉(日本語)をしっかり身につけてほしいと思ったから。」(小学生の保護者)

2) 家庭でのコミュニケーション

親子間ではポルトガル語で会話し、兄弟間では日本語もしくはポルトガル語と日本語が混在していた。特に子どもが中学生になると、複雑な話題になった時には親子の意思疎通に困難が生じていた。

「私が話していること、彼が話していることが(お互い)わからないときもある。例えばポルトガル語で教育のことについて息子に説明する。私が知っていることを説明するけど、彼はぽかんとしてる。『私が言っていることが分からない?私たちが言っていることをしてないじゃないか』と、彼が理解していないのを目のあたりにする。」(中学生の保護者)

3) 子どもたちの母語

子どもたちが母語であるポルトガル語を忘れてきていることを保護者は心配していた。ポルトガル語での会話はできるが、読み書きができない子どもが多かった。特に小学生の子どもは会話でも、簡単な受け答えしかできなくなっていた。保護者は子どもたちに対して、母語を習得してほしいという要望をもっていた。

「最低限少しはポルトガル語の授業をさせなければならないと心配しているほどです。せめて基礎的なことは覚えてほしい。彼らは話すのは分かる。でも書いてあるものは分からない。」(小学生の保護者)

4) 子どもの学力

子どもの学力について心配をしている保護者もいるが、子どもがよく勉強しているので、学力については切実な問題と捉えていない保護者が多かった。子どもが学習している状況について把握できていない親もいた。

「確認はできないんで、彼女(娘)が理解できていると言ってることを信じている。学期末の通知表で本当に彼女が言ってる通りかどうか見てみる」(小学生の保護者)

5) 子どもの将来、進路

子どもの将来については日本で進学させたいという強い希望を持っていた。一方で周りに進学した外国人の子どもが少ないことや進路についての情報が把握できないた